

二〇二五年度

山梨英和大学

一般選抜B日程試験問題

国語

注意

- 一 問題用紙解答用紙の冊子は、試験開始の合図があるまで開けないで下さい。
- 二 試験開始直後に次のことを確かめ、解答用紙を冊子からはずして使用して下さい。
 - ア 問題用紙は表紙を除いて四枚です。ページの順番も確認して下さい。
 - イ 解答用紙は、一枚です。
- 三 受験番号は、解答用紙に記入して下さい。氏名は書いてはいけません。
- 四 答えは解答用紙に記入して下さい。
- 五 問題用紙は、試験終了後、各自持ち帰して下さい。

国語

次の問題文を読んで、後の問に答えなさい。

某新聞の書評委員をやっていた期間には、ひっきりなしに新刊本が送られてきた。しかし、天あまの邪鬼じやくの私
は、

こちらから頼んでもいない本を送りつけられても、一部の例外を除き、書評で取り上げるどころか、ほとんど読むことすらしなかった。現金なもので、書評委員の任期を終えてからは、本がパタリと送られてこなくなつた。だからこそ、それを知った上で恵贈していただいたのならば、やっと時間もできたことだし読んでみようという気持ちにもなる。書評委員などとは無関係の恵贈本こそ、本当に信頼できる友人とそうでない人間とを区別する試金石Bにほかなるまい。というわけで、最近、(私のほうでは)信頼できる友人だと信じている植物学者のT先生に送っていただいた本に刺激を受け、考えさせられたことを書いてみたい。

私が小学生の頃住んでいた高知県室戸市吉良川町は、まさに自然に恵まれていた。小学校までの通学路のすぐ脇は木が生い茂る山だったし、町は2つの川にはさまれており、友達の家遊びに行くため、毎日のように自転車で橋を渡っていた。さらに、住んでいた借家の裏側の国道を横切るとすぐそこには太平洋が広がっていた。今考えるととてもゼイタクな環境だったのだが、だからこそ逆に、私はありのままの自然にはあまり興味をそそられなかったようだ。

おかげで、今でも名前を知っている天体は太陽と月のみ。植物となると、朝顔、菊、チューリップ、マリーゴールド、オジギソウ、椿、たんぽぽ以外は実物と名前を結びつける自信がない。私がこんな人間であることを知ってか知らずか、T先生が送ってくださった本は、植物好きが見ることのできる世界のへⅠへ深さを思い知らせてくれたのだった。

(a) その本の書名にも一部用いられている、最初の文章「漱石の白くない白百合」の内容を簡単に紹介しておこう。夏目漱石の作品にはしばしば百合が登場する。なかでも『それから』において「白百合しろゆかり」は重要

な役割を果たしている。私レベルの読み手であれば、白く美しいものを象徴する花という漠然としたイメージを抱いて読み進めるだけであるが、漱石と植物をともに愛してやまないT先生がそれCで満足できるはずはない。色、香り、形態、季節など、小説中の記述を総動員して、その種類をへⅡへに絞り込み、どちらかといえ
ば消去法的にそれが山百合であるとの結論に至る。

(b)、本当に山百合を見たことがある人が、それを「白い」百合と形容するにはかなり無理があるとも悩む。とすればこれは漱石のへⅢへ修辞に過ぎないのか、あるいは、この科学的推論のどこかに誤りがあるのか。この(一般人にはやや病的にすら思える)漱石愛好家かつ植物学者による問題提起と()問()答

A

D

の過程が、科学的に極めて理路整然と綴られた名作である。

ちなみにこの文章はT先生が大学院に入学した1988年に、なんとこの『UP』誌上で発表した処女作であるらしい。漱石作品に対する造詣の深さと、植物に関する正確な知識の双方に裏打ちされた、妥協を許さない真っ直ぐな論理展開は、若者（当時はそうだったはず）ならではの迫力に溢れており読んでいて心地よい。

(c) 当書では、この最初の考察に加えて、「描かれた山百合の謎」(1993年)と「白百合再考」(2012年)でこのテーマがさらに深掘りされ、へIVへな結論が提示されている。ここではこれ以上の紹介は控えるが、『三四郎』『それから』『門』の三部作と同じく、T先生自身の成長も感じられる(失礼!)。というわけでこの3作をまとめて読まれることを是非お勧めしておきたい(特に、『UP』を読んでいるとは思えない文学部の学生諸君には、学位論文とはどうあるべきかの参考になるに違いない!)。とまあ、T先生の著作に対する拙い読書感想文レベルの紹介はここまでとし、以下ではそれを受けた愚考を展開してみたい。

物理学の目標の一つは、この世界を構成する物質と法則の基礎を突き詰めることである。そしてそれは、いわゆる要素還元主義と呼ばれる方法論を採用してスイシン^②することで大きな成功を収めてきた。すべての物質はクォークとレプトンと名付けられた素粒子からなり、それらは4つの相互作用と呼ばれる物理法則に支配されている、という標準素粒子モデルは、その到達点の象徴である。

(d)、そのように世界を切り刻み細かく分割してしまうことで、かえって本質が失われる現象も数多い。無数の自由度をもつ系が互いに相互作用することで、予想もしないような性質を発現することがある。「それらもまた素粒子と4つの相互作用だけで完全に説明できるに決まっている」と原理主義的な主張を繰り返したところで、納得できるものではない。物理現象以外に端的な例を挙げれば、生物と無生物の違い、意識の起源もまた同じである。それらを理解する上では、標準素粒子モデルはほぼ無力である。

言い換えれば、この世界の多様性をありのままに愛^Fでる姿勢なくしては、世の中の森羅万象は理解できないのだ。植物学、あるいはより一般に博物学とはその種の科学である。

正直に告白するならば、私が天体や花の名前を知らない(覚えられない)のは、自分の記憶力が悪いためではない。そもそも数学や物理学方面を志した理由の一つも、いろいろなことを覚える必要性が低い学問だと思っただけだった気がする。植物、動物、昆虫、恐竜などに関して膨大な知識をもつ人を見るにつけ、驚きはそのもの、必ずしも尊敬したことはなかった。いくら名前を覚えていたとしても、世界の本質の理解とは無関係だと信じていたからである。ところが、ある意味ではそれがヘンキョウ^Gな考え、あるいは負け惜しみ以外の何ものでもないことを痛感した。

言うまでもなく、世界を記述し理解する方法は必ずしも科学には限らない。特に、人間の(H)が絡ん

でくると、狭い意味の科学は（まだ）成功しているとは言いがたい。文学の存在価値の一つはまさにそこにあるのだろう。

④

『それから』では、主人公・長井 代助だいすけの価値観や人となり、生き様とカットウカットウが、これでもかこれでもかとしつこく記述されている。また、本筋とは関係ないと思えないイツワイツワの類が長々と続く。要素還元主義的価値観に支配されている人間が読んでいると、あまりに冗長で退屈に思えてくる。仮に私の学生がそのようなスタイルで論文の草稿を書いてきたならば、ヨウシヤヨウシヤなくその文章の9割以上を削除し、はるかに簡潔かつ明快な改訂稿に直して突き返すことだろう。

⑤

ところが、今回あらためて『それから』を読み返してみると、その無意味にすら思えるほど長い記述のおかげで、当初はどう考えても救いようがないと思えなかった代助に徐々に感情移入できる自分がいることに気づいた。私が年をとったせいかもしれないが、自分と異なる視点からの世界Jの記述法に共感できるようになったようだ。

いくら美しい花であろうと、細胞レベルに分割してしまえば、その美しさはすべて消え失せてしまう。したがってその美しさを議論するためには、無数の異なる種に名前をつけるのみならず、その名前に、形、色、香り、原産地、開花時期といった情報を適切にリンクしておくことが必須である。要素還元主義者からみると冗長で圧縮可能でしかない情報なのだが、そこには、ありのままの姿でなくては表現できない世界が個別に実在するのも確かだ。ひよっとすると、それは植物学Kと文学に共通する何ものなのかもしれない。

（ e ）、「立てば芍薬しやくやく、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」という言葉がある。これらの花の実物を知らない

私にとっては、単に「すごい美人」という（ V ）なイメージを想起させる表現に過ぎない。しかし、それぞれの花の色、形状、香り、季節をジューク⑦チしている人にとって、この短い表現から生み出されるイメージは、無限の深さをもたらす。世界の多様性を切り刻むことなく、あえてありのままの姿で理解するには、冗長で重複するがゆえに膨大な情報量が必要だ。そのような非効率な記述法でなくては語り尽くせない世界も確実にある。「漱石の白くない白百合」は、それを端的に教えてくれた。

子供の頃に見た『鉄腕アトム』のテレビ放送で、今でも忘れられない場面がある。アトムが人間の友達と花火大会を見に行ったとき、皆が花火の美しさに大喜びしている横で、アトムの目に映っていたのは元素記号のみ。アトムは「なんで人間はこんなものをきれいだと思って喜んでいるのだろう」と、ぼそつと呟く⑧。

細部は別として、大まかにはこのようなシーンであった。当時の「科学の子」たるアトムが必然的に要素還元的世界観しかもち得ないことを表象した名場面である。しかし、近い将来、世界をありのままに愛でることができるAIが出現する可能性は高い。芸術作品のコンテンツ⑨も怪しげな人間ではなく、AIに任せるほうが信

頼できる時代もすぐそこかもしれない。そうなれば、SFや科学論文を執筆するAIのみならず、芍薬、牡丹、百合を表象としてクシする純文学を創作するAIも生まれるに違いない。その時代のAIアトムは「人間はな^Lぜこの世界の真の美しさを愛でることができないのだろうか」と寂しそうに独白してしまうかもしれない。

(須藤靖『AIなき世界に戻るか?』)

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字には読みをつけなさい。

問二 空欄(a) ～ (e) に当てはまる最も適切な接続語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 例えば イ やはり ウ まず エ ただし オ さらに

カ つまり キ しかし ク また ケ 一方で コ あるいは

問三 空欄(I) ～ (V) に当てはまる最も適切な語句を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般的 イ 皮相的 ウ 結果的 エ 驚異的 オ 絶対的

カ 文学的 キ 科学的 ク 徹底的 ケ 世界的 コ 最終的

問四 傍線部A「天の邪鬼」、B「試金石」、E「造詣」、F「森羅万象」、G「負け惜しみ」の意味をそれぞれ答えなさい。

問五 傍線部Dの二箇所空欄には、共通して当てはまる最も適切な一語があります。それを答えて、四字熟語を完成させなさい。

問六 傍線部C「それ」、傍線部I「そこ」の指示語が指しているものを、それぞれ答えなさい。

問七 空欄(H) に当てはまる最も適切な語句は何か、本文中から抜き出して答えなさい。

問八 傍線部Jについて、本来、筆者が行っていた世界の記述法とはどのようなものであったのか、本文の文脈に即して答えなさい。

問九 傍線部Kとはどんなものなのか、本文での説明を簡単にまとめなさい。

問十 傍線部Lの理由について、筆者の主張を踏まえた上で、あなたが考えたことを書きなさい。